

一

次の各問いに答えなさい。

問一 次の各文の——線部のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

- 1 別の問題がハセイする。
- 2 母親の顔を見て、気持ち<sup>が</sup>ヤワら<sup>い</sup>だ。
- 3 スイ<sup>チ</sup>ヨク<sup>に</sup>線<sup>を</sup>引く。
- 4 その発言はコ<sup>ン</sup>ラン<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>ね<sup>く</sup>。
- 5 日本の縮尺<sup>図</sup>を見る。
- 6 感動すること<sup>必</sup>至<sup>の</sup>映画だ。
- 7 作文を集めて冊子<sup>に</sup>する。
- 8 時間の都合で割愛<sup>する</sup>。

問二 次の①～④の意味を持つ四字熟語を、あとの語群の漢字を組みあわせて、それぞれ完成させて答えなさい。

- ① 言葉で表現できないほど、まったくひどいこと。
- ② いくつかの中から、よいものや必要なものを選び取って、そうでないものは除くこと。
- ③ 名前はあるが、その実質がともなっていないこと。
- ④ 重要なこととどうでもよいことを、逆にあつかうこと。

〈語群〉

不 選 道 反 実 同 捨 本 言 択  
変 無 名 骨 倒 取 有 断 末 語

## 二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「あなたが目指すのは鉄人28号ですか？ それとも鉄腕アトムですか？」

私は新人生に出会うといつもこう問いかけ、「鉄腕アトムみたいになろう」と呼びかけています。「鉄腕アトムを目指してどういうこと？」「ロボットになる気なんてありません」って思った人、ごめんなさい。ロボットになれってことじゃないんです。昔々、「鉄腕アトム」と「鉄人28号」という大人気ロボットマンガがありました。もちろん少年であった私もこのマンガに夢中になっていました。どちらもとても強いヒーローロボットなのですが、大きな違いがあります。それは鉄人28号が人間の操作するリモコンで動くのに対して、鉄腕アトムは自分で考えて動き、喜んだり悲しんだりという感情も恐怖心もある人間のようなロボットだということです。「鉄人28号」はリモコンを持つ人によって正義の味方にも悪魔の手先にもなります。それは自分の意志を持たず誰かの言う通りに動くロボットだからです。反対に鉄腕アトムは自分で考えて行動しますから、悪魔の手先にはなりません。

小学校時代のうちに、もう鉄腕アトムレベルになったという人もいるかもしれませんが、でも「次何するの？」「できないからやって」なんて誰かに言っただけじゃありませんか？

自分がどうしたらいいか自分で考えることをせずに、誰かの指示を待って動いてばかりいる人は、まだまだ鉄腕アトムレベルとは言えません。それから、何かいけないことをしたり失敗したりして親や先生から「どうしてこんなことをしたんだ！」と叱られたとき、「だって〇〇がやろうって言ったんだもん」なんて言い訳をしている人も鉄腕アトムのレベルとは言えません。小学生までならそれも許されるかもしれませんが、中学生になったら大人へと近づくもう一歩次の段階に入ります。ですから自分で考えて、先を見通しながら行動する力をぜひつけていきたいものです。そういう力がつけられるような自分を目指す中学三年間にしてほしい、私はそう思っています。

中学生になったユウマ君は、授業中に立ち歩いたり大声でおしゃべりしたりして、よくいろいろな先生から注意されています。あるとき、注意した先生にこんなことを言っていました。

「人間は自由なんだからボクは何をしてもいいんだ！」

このユウマ君の言葉、あなたはどう思いますか。彼はどうしてこんなことを言ったのでしょうか。ユウマ君のご両親は小学校の卒業式の日、彼

にこんな話をしていました。

「これからはユウマも中学生。親にいちいち聞いてばかりしないで自分で考えて行動しなくちゃね」

これまで親や先生から「○○しなさい」「○○してはいけません」と細かく言われ続けてきたユウマ君。この言葉を聞いて「これからは何でも思いのままだ」と誤解したのでしょうか。理由はどうか。自分の「やりたい」放題がまじめに授業を聞きたいと思っている人の「やりたい」を邪魔してしまっているのです。彼の行動は学級会で問題とされ、「自由」の意味について考えるきっかけとなりました。この話し合いをおして自分のしたことの意味を理解した彼は、しっかり反省し「ごめんなさい」とみんなに謝ることができました。

こんなこともありました。カイト君は、朝出かけるときにお母さんから「今日は雨が降るから傘を持っていきなさい」と言われたので、傘を持って登校しました。I 結局雨は降りませんでした。ですからせっかく持っていった傘もそのまま持ち帰ることになってしまいました。

II 運悪く、その日は学校から持って帰らなければならないものが多かったので、傘はとても邪魔でした。大変な思いをしてやっと家にたどり着いたのです。そのときカイト君は、お母さんにこう思いをぶつけました。「まったくもう、お母さんが傘を持っていけなんていうからいけないんだよ。こんな大変なことになっちゃったのはお母さんのせいだ！」こんなケイケンはありませんか。

小さい時は親や大人がいつもそばにいて、すべきことやしてはいけないことについて指示を出し、子どもはその通りにしていればだいたいうまくいっていたし、III それで困ったことがあればいつも誰かが助けてくれました。うまくいかなかった不満は指示を出している人にぶつければよかったです。誰かの指示で動いていたとき、失敗はその誰かのせいにするのができました。でも、自分で決めた行動の場合は誰のせいにもできません。結果はすべて自分が引き受けなければなりません。IV 「自分で決めていいよ」って言われたとき、「自由って結構大変」っていう感想を持った中学生もいます。

D 実は「自由」と言ってもいくつかの意味があります。一つはよりよい「今」を求める自由、自分を縛っている不自由さから解放されることです。これを「くからの自由」と呼ぶことにしましょう。もう一つはより良い「未来」に向かう自由です。自分の願いや自分で考え決めたことに従って歩いていく自由です。私はこれを「くへの自由」と呼んでいます。自由には「くからの自由(今)」と「くへの自由(未来)」があるので。さっきのユウマ君の「何をしてもいいんだ！」という言葉はV を主張したのですね。





問六 ——線部D「『自由』と言ってもいくつかの意味があります」とありますが、筆者が述べる「自由」の説明として適切なものを次のア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 不自由さから解放される自由は、中学生がもっておくべきもので、より良い「未来」に向かう自由は、将来もつことが望ましい自由である。
- イ より良い「今」を求める自由は、不自由さから解放放たれることであり、開放感はあるが、すぐに何をしてよいのかわからなくなる。
- ウ より良い「未来」に向かう自由は、自分で考えて決めて行動するので、誰のせいにすることもできないので大変な面がある。
- エ 「くからの自由」と「くへの自由」は、似ているが全くちがうものであり、「くからの自由」のほうが注意すべき点が多い。

問七 「鉄人28号」と「鉄腕アトム」はどのような人のたとえですか。それぞれ文中の表現を使って説明しなさい。

### 三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

春休みが終わり、橋本泰示は小学校五年生になった。クラスメートにはゲームばかりやっている者もいるが、泰示は忙しかった。学校が終わると、塾に行かなければならない。宿題はたくさんあるし、自分で決めた勉強のノルマもある。それに加えて、私立中学校を受験するつもりだったので、模擬テストも受けなければならぬ。

まあ勉強は嫌いじゃないから、言うほどストレスにはなっていなかった。疲れはするが、学校も塾も休まずに行っている。

そんな泰示が通う塾に、新しい生徒が入ってきた。中里文香という名前の女子だった。

引っ越してきたばかりだと紹介された。どこの小学校かは教えてくれなかったが、塾なんてこんなものだ。個人情報だし、塾に友達を作りに来ているわけではない。途中から入って来る生徒もいれば、いつの間にか塾に来なくなっている生徒もいた。一々、気にかけてはもらえない。

この世にはたくさん人間がいて、そのほとんどは自分とは関係がない。文香も、その一人だと思っていた。

だが、気にかけてはもらえないことが起こった。文香が最初の塾内テストで二番を取ったのだ。一番の泰示と、たった三点差だった。国語と社会は負けていた。一番を脅かされたのは、塾でも学校でも初めてのことであった。

「中里ってすげえな」

そんなふうには、塾で評判になった。いきなりの好成绩はインパクトがあった。男子も女子も、文香に注目した。

もちろん泰示も驚いた。文香を意識した。顔が好きなアイドルに似ていると思ったが、話しかけたりはしない。まだ小学生だし、女子に気安く話かけることのできるタイプではなかった。一言もしゃべらないまま一ヶ月が経った。

月に何度かは、日曜日にも塾がある。塾内テストがあって、朝から夕方近くまで勉強する日だった。

弁当を持って行くことになっていたが、泰示の親は忙しく作ってもらうことはなかった。自分で作るのも面倒くさいから、お小遣いをもらってコンビニでパンやおにぎりを買って済ませていた。そんな子どもは塾にたくさんいた。手作りの弁当を持って来る生徒のほうが少ないくらいだ。

だからだろう。ある日曜日の塾の昼休みに、コンビニに昼食を買いに行くと、好みのパンやおにぎりが売り切れていた。

弁当ならあったが、教室ではなく公園のベンチで食べるつもりだったので、面倒なものは買う気になれなかった。

結局、クッキーとコーヒー牛乳を買った。レジ袋はいらなから、買った物にテープを貼ってもらった。おやつみただけど、両方とも好物だった。

勉強していると甘い物が欲しくなるし、さっさと食べられるのもいい。足早に、いつもの公園に向かった。

その公園は塾の裏手であって、あまり人がいない。見かけると言えば、ここを縄張りしている黒猫と、ときどき近くにある劇団の人が発声練習をしているくらいのものだ。今まで何度かここで昼食をとっていたが、誰かがいたことはなかった。自分専用の食事場所のように思っていた。

でも、このときにかぎって女子がいた。黒猫も劇団の人もいなかったが、その代わり中里文香がいた。

塾内テストで泰示を脅かした文香が、公園のベンチに座っていた。食事をするつもりらしく、バスケットとスープジャーを膝に載せている。

「マジかよ……」

声に出さず呟いた。困ったことになった。その公園にベンチは二つしかなく、もう一つは壊れて座ることはできない。誰かがいるとは思っていなかったなので、代替案は考えていなかった。

泰示の取る道は、それほどたくさんはない。思い浮かぶ方法は、三つだけだ。

ここで立ったまま食べるか。他の場所をさがすか。教室に戻って食べるか。

迷っていると、文香が話しかけてきた。

「ごはん、食べないの？」

「……食べるけど」

動揺しながら答えた。話しかけてくると思っていなかったのだ。

学校や塾の女子とすれ違ったりすることはあるが、挨拶をするでもなく、お互いに見て見ないふりをするのが普通だった。こっちから話すことも、向こうから話しかけられることもない。

だけど、文香は泰示に話しかけてきた。泰示が黙っていると、文香がまた言った。

「座って食べたなら」

自分の隣を指さした。同じベンチに座れと言っているのだ。泰示の動揺どうようが大きくなった。

立ったままでいいと答えようと思ったが、それじゃ文香を意識しているみたいだ。それはそれで悔くやしい。

「そうだね」

何でもないことのように装って、泰示は文香の隣となりに座った。そして、すぐに後悔した。ベンチは小さく、文香との距離きょりが近かったのだ。手を伸ばせば届く位置にいる。

いくら何でも近すぎる。泰示は緊張きんちようし、ドキドキと鳴る自分の心臓の音が、文香に聞こえてしまうのではないかと心配した。

女子のほうが男子よりも大人だというが、本当のことらしく文香は平然へいぜんとしていた。①バスケットを開けて、ごはんを食べようとしている。

見るともなく見ると、バスケットに入っているのはサンドイッチだった。それも玉子サンドだ。

でも、泰示の知っている玉子サンドとはずいぶん違ちがう。例えば、さっきのコンビニには売っていない、ちょっと変わったサンドイッチだった。じっと見すぎたのかもしれない。文香が、バスケットごとサンドイッチを差し出してきた。

「一個、あげる。よかったら食べて。けっこう上手にできたと思うから」

その台詞に驚いた。一個、あげると言われたことにもびっくりしたが、その後の台詞には耳を疑った。

「自分で作ったの？」

思わず聞き返してしまった。子どもが作ったと思えないくらい、サンドイッチは綺麗きれいに作ってあった。

「うん。ママが作った玉子を挟はさんだだけだよ」

文香が答えた。いたずらっぽい顔をしていた。冗談じょうだんを言ったと分かった。

泰示は吹き出し、笑いながら言葉を返した。

「B  
それ、いんちきだよ。ぜんぜん自分で作ってないから」

「そうかも」

文香が真面目な顔で言って、小さく笑った。その笑顔を見て、泰示はさらに突つっ込こんだ。

「かもじゃないから」

こんなふうには女子と話すのは初めてのことだったが、笑い合ったおかげで肩の力が抜けた。相変わらず心臓はドキドキしていたけれど、さつきとは違う気がした。

「もらっていいの？」

「うん」

「ありがとう」

素直に礼を言い、サンドイッチに手を伸ばし、弾力のあるパンを取った。そのまま口に近づけると、パンと玉子とバターの香りがした。そのサンドイッチを平らげ、文香に感想を伝えた。

「すげえ旨い」

「本当？お母さんに言っておくね。きつと、よろこぶから。橋本君、ありがとう」

どうして文香の母親がよろこぶのか。なぜ、ありがとうと言われたのか。

そのときの泰示は、言葉の意味さえ考えなかった。

へ 中 略 へ

「橋本って、中里文香と付き合ってるの？」

教室に戻って席に座ったとたん、田村という男子に聞かれた。わざわざ泰示の席までやって来て質問してきた。

田村は成績も悪く、塾に遊びに来ているようなやつだ。不良とまで言わないが、真面目ではない。授業中に、スマホでゲームをやったり、漫画を読んだりしている。

馬鹿な男子だと思う。勉強が嫌いなら塾に来なければいいのに、お金と時間をもったいない。

いつもなら相手にしないのだが、この日は聞き返してしまった。文香の名前を出されたからかもしれない。

「なんで？」

②ぶつきらぼうに聞き返すと、田村がニヤニヤしながら答えた。

「さっき、二人でベンチに座ってたじゃん」

—見られていた。

胸がドキンと鳴った。田村にからかわれると思った。そして、文香にクッキーを断られた記憶きおくがよみがえった。困った顔をされたことを思い出した。

クッキーの一枚くらい、もらってくればよかったのに。

そう思うと腹が立ち、文香に文句を言いたい気持ちになった。だから、泰示は迷惑めいわくそうな顔を作って、田村の質問に答えた。

「中里文香と付き合ってたんじゃないよ。たまたま一緒いっしょのベンチにいただけ」

この返事は問題なかった。言い方は素っ気ないが、嘘うそはついていない。でも、この後がいけなかった。

「へえ。じゃ、中里文香のこと、好きとかじゃないんだ？」

そんなふうに言われて、からかうように言われて、泰示は余計なことを言ってしまった。それも大声で言ってしまった。

「好きなわけじゃないじゃん。ぶっちゃけ、嫌いだよ。あいつ、ブスだし。しゃべるのも嫌いや」

その瞬間しゆんかん、教室が静まり返った。何人かの生徒が教室の入り口を見た。教室の入り口に、文香が立っていた。

「あーあ。やっちゃった。おれ、知らない」

田村が言った。

文香は、泰示の言葉を聞いていた。

あんなこと、言わなければよかった。

嫌いだなんて、ブスだなんて、しゃべるのも嫌なんて、言わなければよかった。せめて、その場で謝ればよかった。泰示は何度もそう思った。

謝りたくても謝れない状況じようきょうになってしまったのだ。

その日を境に、文香は塾に来なくなった。何日か休んだ後、塾をやめてしまった。泰示の言葉が原因でやめたとは思えないが、無関係とも思えない。

どうしてやめたのかを聞いてみたかったが、住所も電話番号もメールアドレスも知らない。ネットで検索してみても同姓同名がひっかかるだけだった。文香とは同じ小学校ですらないので共通の知り合いもおらず、連絡を取る方法はなかった。

D ぽっかりと胸に穴が空いた気持ちになったが、誰に相談することもできず、ただ、月日だけが流れた。

やがて夏休みになった。志望校が具体的に決まり、私立中学校受験に向けて、塾の授業や宿題が一気に増えた。塾の授業についていけず、やめる生徒が何人もいた。泰示の知り合いだと、田村も塾に来なくなっていった。

勉強は苦にならない。好きだった。学校でも塾でも一番の成績を取り続けている。ガリ勉だと馬鹿にされることもあったが、気にしなかった。努力を笑う人間なんて無視すればいい。相手をするだけ時間の無駄だ。

志望校に合格すること。

それに加えて、いや、それ以上の目標があった。他の塾と共通の模擬テストの成績優秀者に名前を載せることだ。

どこに行ってしまったか分からないが、成績優秀者のリストを、文香はきつと見ていると思ったのだ。泰示の知らない塾で、模擬テストを受けているはずだ。成績のよかった文香のことだから、中学校受験をすると信じていた。

だから、たくさんの模擬テストに申し込んでいた。電車に乗って、遠くの会場の模擬テストにも足を運んだ。どこかで文香と会えるのではないかと期待していたのだ。

けれど、会えなかった。

文香はいなかった。

どこの会場にもいなかったし、成績優秀者にも名前がなかった。泰示の名前がいくら載っても、見てくれているかも分からない。どんなに頑張っても、どこに模擬テストを受けに行っても無駄だった。

まるで最初からいなかったみたいだ。文香は消えてしまった。煙みみたいに、泰示の前から消えてしまった。

もう二度と会えないのだろうか。

誰がいなくなっても、世の中は動き続ける。時間は止まることがない。

夏期講習が終わり、季節は秋になった。勉強しているうちに、いつの間にかカレンダーは十一月になろうとしていた。毎日同じ繰り返しのように見えるが、少しずつ、いろいろなことが変わり始めていた。

例えば、六年生になると本格的に受験勉強が始まる。塾生の数も増えて、受験に向けてのクラス分けがあった。塾の進路相談も始まる。親を交える場合もあれば、子どもだけで塾の先生と話すこともある。たぶん、塾の実績になるからだろう。成績のいい生徒は、何度も呼ばれた。

その日、泰示は塾の先生に呼ばれた。来年から、難関私立中学校を目指す一番上のクラスに入ることになっていた。その確認をしたいようだ。志望校はとくに決めていたし、模擬テストの成績は問題がなかった。泰示のほうからは、相談することもない。

「この調子なら大丈夫だ。でも、気を抜かず勉強するんだぞ」

塾の先生は、前に面談をしたときと同じ台詞を言った。入塾したときからいる四十代の男の先生だ。

「はい。気を抜かずにがんばります」

話を終わらせるつもりで応えた。先生のことは嫌いではないが、長く話したい相手でもない。早く一人になりたかった。だけど、面談は終わらなかった。

「橋本、おまえ、疲れてないか？ 身体の調子とか悪くしてないか？」

本題に入る口調で、先生が聞いていた。どうやら、泰示の体調を心配してくれているようだ。

「大丈夫です」

嘘ではない。身体は元気だった。風邪も引いていない。ただ食欲がなくて痩せてしまっていた。

両親は泰示を心配して病院に連れて行ったが、やっぱり異常はなかった。辛いのは身体ではなく、心だった。文香がいなくなってから、胸の奥がいつも苦しくて痛かった。一人していると涙が流れることがあった。

塾の先生にそのことを言うつもりはなかったが、向こうから文香のことに触れてきた。

「まあ、塾にライバルがいなくていいのも、辛いかもしれんな」

自分の言葉に納得するように頷き、ついでのように付け加えた。

「中里がいれば、いいライバルになったのにな」

びっくりした。まさか、ここで文香の名が出てくるとは思っていなかった。驚いている泰示の顔を見ず、先生は独り言を言うように続けた。

「子どもが死ぬのはやり切れんなあ……」

「え？」

意味が分からなかった。

少し考えて、とりあえず問い返してみた。

「……誰が死んだんですか？」

先生が、関係のない話を始めたのだと思った。もしくは聞き間違いをしたか。

でも、そうじゃなかった。話はつながっていた。先生は、文香のことを話していた。

「なんだ、知らなかったのか」

余計なことを言ったという顔をしたが、泰示が問うように見ていると、肩をすくめて口を割った。

「中里だ。亡くなったんだよ」

「え？」

「おぼえてないか？ 中里文香。ほら、いつかの塾内テストで二位だった生徒。死んじゃったんだよ」

「いつですか？」

「塾に来なくなってすぐのことだ」

「ど……どうして……」

「病気だ。ずっと病気だったんだよ」

泰示の顔を見て、ようやく何か気づいたように、先生は文香のことを話してくれた。そこには、泰示の知らない文香がいた。

身体が弱く、小学校に行けない子どもがいる。

遊びにも行けず、病院から離れられない子どもがいる。

文香も、そんな一人だった。生まれつき心臓が弱く、家にいるよりも入院している時間のほうが長かった。ランドセルや教科書は持っているが、学校には一日も行っていない。

人間の身体は不思議なもので、病気が治る見込みはなかったが、元気な時期もあった。普通の子どもみたいに動ける時期があった。せめて、その間だけでも学校に行きたいと、文香は両親と医者に訴えた。

みんなと勉強したい。

友達が欲しい。

何度も何度も、そう頼んだという。文香は小学校に行きたかった。一生に一度でいいから学校に行ってみたい、と言った。

文香には友達がいなかった。話し相手は、両親と医者、それに看護師くらいのものだ。

小児病棟には、たくさんの子どもたちが入院しているが、文香はその子どもたちと接しようとはしなかった。いつ死ぬか分からない子どもも多く、悲しみに耐えられないと思ったのだろう。

両親には、そんな文香の気持ちEが痛いほど分かった。病院しか知らない我が子が不憫だった。同世代の子どもたちと遊ばせてやりたいと思っていた。

だが、学校へ行くとなると負担が大きすぎる。毎日通うのは無理だろうし、体育もできないだろう。そもそも受け入れてもらえるか分からない。そこで、医者と相談をした。話し合った結果、学校ではなく塾に通わせることにした。学校より融通が利くし、同い年の子どももたくさんいる。

父親は、文香に聞いてみた。

「どうかな？」

「塾の勉強って難しいんだよね。ついて行けるかなあ……」

文香は不安そうな顔をしたが、その点は父親は心配していなかった。

「大丈夫さ」

父親は太鼓判を押しした。学校には行っていないが、文香は家や病院でちゃんと勉強していた。問題集や参考書も持っているし、難しい通信教育もやっている。学校に行ける日を夢見て勉強していることを両親は知っていた。

結局、学校には行けなかったが、塾に通えることになって文香はよろこんだ。半分しか願いが叶わなかったのに、よろこんだ。

「友達できるかなあ」

うれしそうに、でも少し心配そうに両親や医者に言った。一人でいいから、友達を作りたいと言った。一緒におしゃべりしたり、並んでごはんを食べたりしたいと言った。

そんな文香を見て、両親は涙をこらえた。娘の一生が長いものでないことを知っていたからだ。

話を聞き終えた後、泰示は胸がいっそう苦しくなった。面談が終わると、塾のトイレの個室に駆け込んで泣いた。

先生の話が——病院で勉強する文香の姿が、泰示の脳裏を駆け巡った。塾に行くことを楽しみにしている文香の姿が思い浮かんだ。

それなのに、文香の悪口を言ってしまった。

病気の女の子に嫌いだと言ってしまった。

友達を作ろうと塾に来たのに傷つけてしまった。

「ごめんなさい、ごめんなさいと声に出さずに謝った。でも、今さら謝っても手遅れだった。文香は死んでしまった。遠くに行ってしまった。」「ごめんなさい……」

どんなに謝っても、文香には届かない。人生には取り返しのつかないことがあるのを、泰示は知った。

(高橋由太『ちびねこ亭の思い出ごはん 黒猫と初恋サンドイッチ』)

問一 ――線部①②③の本文中における意味として適切なものを、あとのア～エの中からそれぞれ一つ選んで記号で答えなさい。

① 平然と

ア 興味を示さず、冷たい様子      イ 落ち着いていつもと変わらない様子      ウ 強がっている様子      エ 素直に喜ぶ様子

② ぶっきらぼうに

ア 怒りをにじませて      イ 興味津々で      ウ 不愛想な感じで      エ 驚いた様子で

③ 肩をすくめて

ア 意味がわからない様子で      イ 納得いかない様子で      ウ 気にしない様子で      エ しょうがないという様子で

問二 ――線部A「ドキドキと鳴る自分の心臓」とありますが、心臓の働きを説明した次の空欄①②③に当てはまる語句をあとのア～オからそれぞれ選んで記号で答えなさい。

心臓は（①）を全身にじゅんかんさせて、体に必要な（②）や養分、そして不要な（③）を運んでいる。

ア 二酸化炭素      イ 水      ウ 血液      エ によろ      オ 酸素



